

8. 文学・芸術

8.1. 三島由紀夫『豊饒の海』

「幼い頃、名門華族の綾倉家へ預けられた松枝清頭は、綾倉家の令嬢、聡子とともに育った。時が経ち、清頭は久しぶりに聡子と再会するが、聡子への恋心を素直に表せず、いた。やがて聡子に宮家との縁談が持ち上がるが、清頭は目を背けたままだった。清頭が聡子への愛を自覚したのは正式な婚約発表の後だった。天皇の勅許が下りた婚姻と知りながら、清頭は聡子に求愛し、聡子もまた、その愛を受け入れていく。」
というあらすじのこの作品は、作家三島由紀夫の、4部作からなる「豊饒の海」の第1作目の「春の雪」である。

補足:

『豊饒の海』…三島由紀夫の最後の作品で、「春の雪」「奔馬」「暁の寺」「天人五衰」から成る四部作。
若くして死んだ主人公が、輪廻転生によって何度も生まれ変わるという構成になっている。

『細雪』…大阪の旧家を舞台にした谷崎潤一郎の代表作。三女の縁談を中心にした四人姉妹の物語。

8.2. フランスの文芸上の傾向の変遷

17世紀に始まった古典主義は、古代ギリシア・ローマの文化を理想とし、調和と形式的な美しさを重視しようとした。しかし、18世紀末頃からは、中世をたたえるロマン主義が古典主義に対して出現し、個性や感情の重視と歴史や民族文化の伝統の尊重を主張した。さらに、19世紀半ばには、写実主義がロマン主義への反動として興り、社会や人間を客観的に、ありのままに描こうとした。そして、19世紀後半からは、写実主義をさらに強調した自然主義が興り、社会の矛盾を追及し、人間の俗悪な部分も描写した。

補足:

古典主義…17世紀ルネサンス時代の、古代ギリシア・ローマを指向し、端正な形式美を重視する傾向。
ラシーヌの悲劇、モリエールの喜劇など。

ロマン主義…18世紀末～19世紀初め。フランス革命の影響で、ギリシア・ローマの古典から自国の歴史に目を転じ、個人の内面を見つめる文学が誕生。

写実主義…19世紀半ば。反ロマン主義運動として広まった。現実社会の実相を描いたスタンダールの『赤と黒』やバルザックなどの作品がある。

自然主義…19世紀後半。写実主義に飽き足らず、心理学など科学的視点から見て人間の真実を描こうとした。代表的な作品にゾラの『居酒屋』。

耽美主義…19世紀後半。ボードレーンなど。美の創造を至上目的に。

象徴主義…19世紀後半から20世紀前半。主観を重んじ、内面的世界を象徴によって表現する思潮で、ランボー、マラルメなどの詩人が生まれた。

8.3. 近世の文学

8.3.1. 『野ざらし紀行』

『野ざらし紀行』は松尾芭蕉(俳人)の最初の紀行文である。

8.3.2. 『新花摘』

『新花摘』は与謝蕪村と門人によって編集された句文集である。

8.3.3. 『おらが春』

『おらが春』は身の雑事を日記形式で記した小林一茶の作品である。

8.3.4. 『好色一代男』

『好色一代男』は井原西鶴の処女作で、浮世草子の代表的作品。

西鶴の晩年に書かれた『日本永代蔵』『世間胸算用』は町人物と呼ばれる。

8.3.5. 『曾根崎心中』

近松門左衛門の人形浄瑠璃『曾根崎心中』は、世話物の代表的作品である。

8.4. アメリカの文学史の思潮

第一次世界大戦中に成年期を迎えたヘミングウェイらは、戦争の悲惨さに触れて旧世代の思想や宗教などに不信感をもち、新しい生き方を求めてパリなどに渡った。自堕落な生活を送る彼らを、女流文学者ガートルード・スタインはロスト・ジェネレーションと呼んだ。彼らは絶望と虚無のなかで社会に反抗し、かたくなに自我を守りながら、やがて新しい文学を生み出した。その代表的な作品にヘミングウェイの日はまた昇る、S・フィッツジェラルドの『楽園のこちら側』などがある。

補足：

「ロスト・ジェネレーション」はパリなどで生活する若いアメリカ人を国籍離脱者とみたスタインが名づけた呼び名で、日本では「失われた世代」「迷える世代」「喪失の世代」「幻滅の世代」などと訳されている。ロスト・ジェネレーションに属するのがS・フィッツジェラルド、フォークナー、カミングズなどで、フィッツジェラルドの『楽園のこちら側』『華麗なるギャツビー』などの作品はよく知られており、日本でも人気がある。

「アメリカン・ルネサンス」はそれより1世紀近く前の19世紀中ごろに生まれたロマン主義の潮流で、代表的な作品にホーソンの『緋文字』、メルヴィルの『白鯨』などがある。

8.5. さまざまな文学作品

8.5.1. 『戦争と平和』

「異なる性格を持ちながらも、ナポレオンを崇拝しているアンドレーとピエールの二人が、歴史的イベントの中で、精神的に成長していく様子を描く。

アンドレーは、『アウステルリッツの会戦』で真の英雄は大衆の中にいることを知り、愛という自己完成の最高の境地に達する。ピエールは、捕虜生活のさなかに愛と犠牲に生きる人物に出会い、個人的な幸福に抛らない人生を選ぶ。」

1805年のオーストリア・ロシア連合軍とナポレオン軍との戦いである。

8.5.2. 『西部戦線異状なし』

『西部戦線異状なし』はドイツの作家、レマルクの作品。第一次世界大戦に参加した学徒志願兵の無情な死を描いた作品で、1930年にアメリカで映画化。

8.5.3. 『風と共に去りぬ』

『風と共に去りぬ』はマーガレット・ミッチェルの長編小説。アメリカの南北戦争を背景に、アトランタの大農園主の娘スカーレットのドラマチックな人生を描いている。1939年に映画化された。

8.5.4. 『罪と罰』

『罪と罰』はドストエフスキーの長編小説。貧しい学生ラスコーニコフは金貸しの老婆を殺してしまうが、娼婦のソーニャに出会い、罪を告白して自首する。

8.5.5. 『嵐が丘』

『嵐が丘』はイギリスの女流作家、エミリー・ブロンテの長編小説。荒地に住む2つの家族の三代にわたる確執を描いている。

8.6. ヨーロッパ音楽の歴史

17世紀から18世紀にかけて、“近代音楽の父”バッハに代表されるバロック音楽が流行した。また、18世紀後半から19世紀初期までの音楽を古典派音楽といい、“交響楽の父”ハイドンや“楽聖”ベートーヴェンらが活躍した。この時期は宮廷音楽から市民音楽への移行期に当たる。古典派音楽は、1830年頃から、個性・意志・感情を強烈に表現したロマン派音楽に発展し、19世紀中頃まで流行した。“ピアノの詩人”と呼ばれるポーランドの作曲家ショパンもロマン派に属する。

補足：

バロック音楽…17世紀初頭から18世紀半ばのヨーロッパ音楽様式。オペラ、カンタータ、ソナタ、コンチェルト、オルガン音楽などが特徴で、バロック音楽を代表する音楽家はビバルディ、バッハ、ヘンデルなど。

古典派音楽…18世紀後半から19世紀初めまでの音楽様式。古典派の代表的な音楽家はハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなど。この時期に交響曲、弦楽四重奏曲、ピアノ・ソナタ・ソナタ形式などが完成された。

ロマン派音楽…19世紀初めから19世紀末頃までの音楽様式。この時期に新しい聴衆として市民層が登場して、総合芸術作品としてのワーグナーの楽劇などの新しいジャンルが生まれた。代表的な音楽家はショパン、リスト、ワーグナーなど。

8.7. 映画祭のグランプリ獲得作品

8.7.1. カンヌ国際映画祭

- ・今村昌平(監督) 深沢七郎(原作) = 『**楳山節考**(ならやまぶしこう)』
- ・衣笠貞之助 = 『**地獄門**』
- ・黒澤明 = 『**影武者**』

8.7.2. ヴェネツィア国際映画祭

- ・黒澤明 = 『**羅生門**』
- ・溝口健二 = 『**西鶴一代女**』『**雨月物語**』『**山椒太夫**(さんしょうだゆう)』
- ・稲垣浩 = 『**無法松の一生**』
- ・是枝裕和 = 『**幻の光**』
- ・竹中直人 = 『**無能の人**』
- ・北野武 = 『**座頭市**』

8.7.3. ベルリン国際映画祭

- ・今井正 = 『**武士道残酷物語**』
- ・宮崎駿 = 『**千と千尋の神隠し**』

8.7.4. モスクワ国際映画祭

- ・新藤兼人 = 『**裸の島**』『**裸の十九才**』

8.7.5. カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭

- ・今井正 = 『**真昼の暗黒**』
- ・家城巳代治 = 『**異母兄弟**』
- ・山本薩夫 = 『**戦争と人間**』

8.7.6. ナント三大陸映画祭

- ・是枝裕和 = 『**ワンダフルライフ**』

8.8. ヨーロッパの建築様式の歴史

11世紀から12世紀にかけて、イタリアのピサ大聖堂に代表されるロマネスク式が西欧で発達した。ロマネスク式では、教会堂は石造り天井が基本で、半円状アーチを多用した。また、12世紀からは、パリのノートルダム寺院に代表されるゴシック式が北フランスから興り、全欧に普及した。その後、16世紀後半から、18世紀初めまで、フランスのヴェルサイユ宮殿に代表されるバロック式が西欧で流行し、18世紀中期には、バロックの後を受け、繊細・優雅な装飾性を特徴としたロココ式がフランスを中心に流行した。

補足：

ロマネスク…11世紀から12世紀。ドーム型の屋根や半円アーチを連ねたアーケードなど、円みのある重厚な様式が特徴。イタリアのピサ大聖堂が有名。

ゴシック…12世紀半ばから16世紀初め。上へ上へと伸びる垂直の方向性が特徴。代表的な建築はイタリアのミラノ大聖堂。

ルネサンス…15～16世紀。巨大なドームをもつ壮麗で華美な設計が特徴。バチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂など。

バロック…16世紀末から広まった、絢爛豪華な装飾デザインを多用した建築様式。セント・ポール大聖堂やヴェルサイユ宮殿。

ロココ…フランス革命前の18世紀の建築様式。優雅で調和の取れた装飾が特徴。ドイツのサン・スーシ離宮が代表的な建築。

8.9. ヨーロッパの作曲家

8.9.1. ロッシーニ（1792～1868年）

イタリアのオペラ作曲家。『セビリアの理髪師』『ウィリアム・テル』が代表作。

8.9.2. ヴェルディ（1813～1901年）

イタリアの作曲家。代表作は『リゴレット』『椿姫』『アイダ』。

8.9.3. ワーグナー（1813～1883年）

ドイツの作曲家。歌劇『タンホイザー』『ローエングリン』、楽劇『ニーベルングの指環（ゆびわ）』（四部作）『パルジファル』などがある。

8.9.4. ビゼー（1838～1875年）

フランスの作曲家。オペラ『カルメン』、劇音楽『アルルの女』などを作った。

8.9.5. プッチーニ（1858～1924年）

イタリアの作曲家。日本女性をヒロインとした『蝶々夫人』や『ラ・ボエーム』『トスカ』『トゥーランドット』などドラマチックでセンチメンタルな作品を作った。

8.10. フランスで活躍した画風

8.10.1. フォービズム

20世紀初めに起こった絵画革新運動。強烈な色彩と太い描線で描く手法で、代表的な画家はマチスやブラマンケ。

8.10.2. シュールレアリスム

1924年の、詩人アンドレ・ブルトンの「シュール・レアリスム宣言」から始まった、理性よりも夢や幻想などに目を向けて潜在意識の世界を表現する文学・芸術運動。ダリ、エルンスト、デ・キリコ、マグリット、ミロなど。

8.10.3. 印象派

19世紀後半。自然を目で見えるままに表現しようとする描写が特徴で、モネの作品のタイトル「印象・日の出」からこの名が生まれた。モネのほかに、ルノアール、セザンヌ、ドガなどがいる。

8.10.4. バルビゾン派

19世紀中頃にパリ郊外のフォンテンブローの森の隅にあるバルビゾン村に滞在して、自然主義的な森の風景画を描いた画家たちを指す。コロー、ミレーなど。

8.10.5. エコール・ド・パリ

1920年代のパリで活躍した外国人画家のグループ。モジリアニ、シャガール、キスリング、藤田嗣治もこのグループに属する。